

出会った瞬間の記録 最後の1枚に賭ける思い



横山 泰介氏

フォトグラファー

1948年生まれ 鎌倉育ち、葉山在住、サーファー。

大学時代に撮影した稲村ヶ崎の波の写真がきっかけとなり、写真家の道へ。写真家、齋藤一男氏に師事、その後 BURUCE OSBOREN 氏のアシスタントを6年間務める。以降40年近くサーファーのポートレートを中心に作品を発表し続ける。ポートレートカメラマンとしてサーファーのみならず、ミュージシャンやアーティスト、ハリウッドスターに至るまで数多くの有名人をこれまで写真に収めてきた。どの作品にも共通しているテーマは、自然とのつながり、そして安らぎ。諷刺漫画家の横山泰三氏を父に、「フクちゃん」で知られる国民的漫画家の横山隆一氏を伯父にもつ。写真集「surfers」(マリン企画・2003年)、「坂口憲二」(ブックマン社・2003年)、「海から見たニッポン」(えい出版2009年)、「Dedication」(ブエノブックス2010年)、「surfers2」(ブエノブックス2017年)、「最高じゃん!」(SUPER LABO22年)を刊行。その他カレンダー「THE PIER」(ブエノブックス2018年発売)がある。他に個展など数多く開催し、湘南を舞台に現在も活躍中。

裏山でセミを取り鎌倉の海で遊ぶ少年時代
風呂の蓋やポート屋さんで借りた木が波乗りの原点
カメラ好きの父親のカメラで偶然撮った風景写真
無人の波が撮れたことからカメラマンの道に
対談で似顔絵を描く父親と写真を撮る自分は同じ道だと

人物の写真は フィルム36枚

その人のいちばん輝いている瞬間を残したい気持ちで臨む
写真は自分で現像して自分で焼くのが頂点だ
サーフボードを手に入れてから何十年経っても変わらない今
五十数年 波の事が気になって仕方がない
好きな事を粛々と続けていく 僕の標語は「最高じゃん」



豊田 弘治氏

サーフアーティスト
有限会社空海 代表

1962年生まれ 大阪府出身。子どもの頃から絵を描くこと、サーフィン、ファッション、音楽が大好き。1992年30歳の誕生日にEnjoy SURFのロゴマークをデザイン。1997年カリフォルニアで初のエキシビジョンを開催。2023年弘法大師御誕生1250年記念の企画展として高野山金剛峯寺にて「こころ」豊田弘治個展を開催。カラフルでピースフルな絵画作品の他、各国様々な企業やブランドとのコラボレーションを通じて独自の世界観を表現し続けている。近年は心の赴くままに本能的で原始的欲求を表現する抽象画の制作活動を始動。

<http://www.sora-umi.com>

出会いはサーフィン雑誌の カメラマンとモデル

豊田 今日は「対談をするなら、この方」と、横山泰介さんにお声かけさせていただきます。お忙しい中ご調整下さいましてありがとうございます。

横山 いやあ、もう、僕みたいにチャランポランな人間で大丈夫かなという気持ちです。

豊田 いえいえ、楽しみにしておりますので……！

横山 本当にありがとうございます。

豊田 知り合ったきっかけは、僕が高校生だった1980年、サーフショップでバイトをしていたのですが、ショップのオーナーから、「ステューシー」というブランドを日本で販売することになってサーフィン雑誌に載せるから「ちょっと明日来てくれ」と言われて……。

横山 広告ですね、要は。

豊田 泰介さんが服のブランドの写真を撮るといふ仕事で湘南から東大阪に来ていて、そこでアルバイトしていた18歳の僕がたまたま声を掛けられて来た、その撮影でした。



横山泰介氏

横山 当時、僕は広告の写真も撮っていて、大体全部自分でディレクションをやったりしていました。それでこのブランドも「面白いね」と。それで行ってみたら、何だか面白いバンクっぽい少年がいて、「これはモデルとしてピッタリだ」と思ったのが、若き豊田さんだったのです。写真を撮ってサーフィンの雑誌に載せてね、これは今でも通用するすごい有名なブランドですよ。

豊田 当時は誰も知らないブランドでしたが、今ではすごい人気の世界的なブランドで、それが45年前の泰介さんと僕の出会いです。僕、子どもでね、高校生でしたから（笑）

横山 ずいぶんとんがった子どもだ

なあ、という印象ではありましたね。ちょうどバンクが流行っていて、「モデルにはちょうどいい」みたいにもう上から下までバンクっぽい少年でしたが、ちゃんとこういういい形になって良かったです。それが今では、もうすごい大御所になってしまってます……。

豊田 当時、僕は美術の高校に行っていて、美術とデザインの勉強をしていて、もう既にサーフィンはしていました。サーフィン、ファッション、アート、デザインというジャンルの中で、実際に仕事をしている人を見たのは泰介さんが初めてでした。当時すごく有名な方で憧れの方でした。そこから何十年も会っていないかったですけど、心のど

こかです〜と憧れていました。

横山 カメラマンになろうとは思わなかったの？

豊田 カメラマン志望はありませんでしたね。

横山 絵の学校に行っていたと聞いていましたが、偶然にバームグラフィックスというポスターを見たのです。何かいい感じのデザインだな、いい感じの絵だなと思っていたら豊田さんだったので、それで「ああ〜」と合点がいて、それから会う機会がありましたね。

豊田 中学の時間にお世話になっていた先輩が、もう亡くなられてしまいましたが、のちにアートの出版をやっている、その方が本を出すとい



豊田氏と知り合うきっかけになった広告写真

うので泰介さんも来てくれて……、あれはビームスさんでやった僕の展示会だったかなあ。

横山 その方は今で言うサーフアート系とか、サーフィン系の写真をすごく世に広めて下さった方で、僕の写真集を出して下さったりして……、残念ながら亡くなられたのですが、その方のおかげで僕なども世の中に認知されるようになったのです。その時代、サーフィンというのはマイナーで今ほど知られていませんでした。オリンピック競技でもなく、アンダーグラウンドに近い世界でしたから、デザインから機材などを揃えるのも全部自分でやっていた時代です。だから面白かったと言えば面白かったですよ。

豊田 再会したのは、ビームスさんのギャラリーでやった僕の個展のレセプションが始まる前の時間に、会いに来て下さって。

横山 楽しかったですね、本当に。「あの時の少年が……！」という感じと、当時から「この子は面白い」という感じもありましたから「やはり」という気持ちでしたね。

豊田 そこで再会して新たに……というのか、時代がこちらに向いたという感

じですね。風がこちらに吹いてきて、それに泰介さんを筆頭に日本のサーフィン系のデザインとかアートなどが盛り上がってききましたよね。

横山 今ではスケートボードもスノーボードも、いわゆる横乗りは当たり前前の世界ですが、当時はまだそこ迄成熟していない時代でしたから、僕らとしては面白くてしょうがなかったですね。「今、向こうで起こっていることは何？」という気持ちでいつもアプローチしていましたから、だから僕達が出来てきたことは間違いじゃなかった、と改めて思っています。

豊田 ホントに先駆けですかね。
横山 まあ、そうなるのかな？ でも、

マイナーなスポーツでしたから誰も注目していないし、何をやっても「何それ？」みたいな感じでした。それが今はもう、スノーボードもすごくなったし、スケートボードはすごく

アートと密接に繋がるようになっていく。そういう土壌が昔から実はあったのですが、やはり拡散しないと分からないでしょ。時代が今の様になっただから全く当たり前みたいになつていきますが、間違っていないかつたし、かっこいいものはかっこいいじゃないですか、という話です。

豊田 良かったですね。こういう世の中、こういう時代になるという予感みたいなものはありましたか？

横山 こんな風にSNSなどが発達したから、それは時代の流れかなと思っ

ています。
豊田 泰介さんがサーフィンをやり始めた頃はどんな感じでしたか？

横山 僕は鎌倉で育ったので、小さい頃は今ほど娯楽がありませんでした。遊びと言えば夏は裏山に行ってセミを取ったり、海で遊ぶというのが当たり前であつて、そこには貸しボードなどもありました。小さい頃はよくお風呂の蓋で「素乗り」というのですが、小さい頃はあれでよく乗ったりしてました。ホントに小さい波でも、子どもだから腹ばいになって乗れてしまつた。小学生くらいになると、海の家の前

のポート屋さんで、多分50円くらいだったと思いますが木の空洞の大きいものを貸してもらって、それを借りて波に乗ると身体も小さいから立つことも出来て、多分、波乗りの原点はそこだったかと思えますね。

豊田 すごい、日本のサーフボードの原点だと思えますね。

横山 サーフボードというものを日本ではまだ売ってない時代でした。横須賀には米軍基地があるので、アメ



豊田 弘治氏



横山氏が写真家をめぐりきっかけになった写真

リカの兵隊さん達は普通に持つてきていたので、「何だろう、かっこいいな」というのは意識にありましたね。でもそれは売ってもいないし……。原点と言えばそういうところでしょうか。

豊田 でも、すごいですよ。ずーっと継続してこられたのですから。

横山 日本でサーフボードができてきたのがいつなのか、はっきりしたことには分かりませんが、多分僕が高校生の頃だと思えます。ひよんなことから長い板を手に入れたのが高校3年生か大学1年生ぐらいの時でした。もう楽しくて楽しくて、何十年経っても変わらないのが今の姿です。

豊田 それは僕も同じ思いですよ。

横山 これは偶然かもしれませんがそれが仕事にも繋がったのです。親父は漫画家で絵描きですが、カメラが大好きでね。1970年代、僕が20代の頃、たまたま木村伊平さんとか、仲のいい錚々たるメンバーでパリに一緒に行きましてね。当時、「ライカ」というカメラがあつて、親父はライカ使いの木村さんに勧められるままに買ってきて、「このカメラはすごいんだぞ」と言いながら全然使わない。それで、僕はそれを勝手に持ち出して、写真を撮ったのです。

豊田 あの稲村ヶ崎の台風の時の写真ですね。

横山 ええ、それが日本で最初のサーフィンの本が出た時に編集長の目に留まって、ポスターと中の記事にも使って下さったのです。それがきっかけで、そのサーフィンの雑誌に関わることになつていく訳です。

豊田 ものすごくいい写真ですよ。

横山 今はもうそのポイントに波が出ていると、すごい人数が入ってきます。でも、当時は最後の1人が出て、たまたま「無人の波」が撮れたのです。それが僕の今のこの状態を作ってくれた、たった1枚の写真、稲村のモノクロの写真です。結局それは……。

豊田 まぐれだったのですか？

横山 まぐれというか偶然というか、誰もいないひとつの波がフレームの中に収まった時、人が誰も乗っていない、本当にいい波を見ると創造性が膨らんで、「僕がこの波に乗りたい」とそこにいる自分を投影してしまった……のですね。

豊田 正しくそれですね。

横山 結局それは何だろうと思うと、やはりそういう風に思わせる写真を撮るのが、本当のことなのではないのかと思つたのです。でも難しいですよ。だからそちらの方には行かないです。

豊田 面白くないからでしょ？

横山 いや、でも風景は風景で確かにハマりますよね。ここにいとサンセットや富士山の夕日など、毎日景色が違って最高なので、そういうのを見ていると「撮りたいな」と思います。でも、やはり僕は人物かなと思つてます。

豊田 そこから写真家としてのキャリアが始まったのですか？

横山 間違いないですね。サーフィンだけでは食べられないので、商業カメラのアシスタントになったりしてしました。その頃友達がアメリカから16ミリのサーフィンの映画を輸入してきて、16ミリだから自分でも作れそうだと思つて、友達に頼んで映画の撮影所に潜り込ませてもらいました。おかげで、変身モノから始まって『伝七捕物帳』まで。まだフィルムでしたから中村梅之助さんの『伝七捕物帳』も撮影部に参加していましたよ。

豊田 随分いろんなことをされたのですね。

横山 そのうちに「京都の太秦撮影所に行つてこい」と言われたのですが、波はないし厳しい徒弟制度ですから、無理やり病氣ということにして辞めさせてもらいました。ムービーですから、ライティングもストロボではない定常光、今はほとんどLEDの目に見える光になっていきます。僕がいた頃は、黒澤明監督の照明をやっていた人が照明技師としていましたし、とにかく芸術的な人達ばかりで、映らない所も照明するようにな……本当にすごく勉強になりました。

豊田 プロの仕事、という感じですね。

横山 その後いろいろな雑誌の仕事で他の方々はストロボを使っていました

が、僕は定常光で撮っていました。フィルムが感度が低くて増感したりと大変でしたが外国人の方は肌の色が結構白くて、それはそれで結構よかったのです。その内にサーフィンが注目される様になって、日本での大会も大きくなってきました。海外から選手を呼ぶ様になって、記事にするのに最終的にはポートレートが必要になったのを機に、自分はポートレートが好きなので……と思いついて、海外のトップの有名選手達のポートレートを撮るようになって、段々その人物に興味が出てきたのです。もちろんそれまでも、様々な方のポートレートを撮ってきましたが、僕にとっていちばん身近な憧れであるサーファーの頂点の人達、海外のプロの人達の写真を撮れるようになったことが今の僕に繋がっているのです。

豊田 それは何歳頃ですか？

横山 20代後半くらいの時からですが、30代になってからの方が真面目にやっていたですね(笑) それをもう30年くらい続けて今も、継続しているのですが、その間にサーファーだけのポートレートの本を、先程の会社の方が2冊出して下さって。

豊田 『サーファーズ』ですよ。

横山 サーフィンをしているという縁で坂口憲二君の写真集も手掛けた。好きなことが仕事になったみたいだね、後付けです、僕の場合は。「運というのものもあるよね」と豊田さんにも言いますが、その運はもちろんだけれどやはり、いざ仕事をした時にそれが出来る自信を自分を持っているかどうかの問題ですよ。親父が朝日新聞にずっと連載していたので、写真を始めた頃はどうしても「親の何とか」と言われて、それは自信がない時は嫌でしょう、多分。でも今なら、逆に「親の光もっと下さい」みたいなね。自信ができることやりは違ってきましたよ。

豊田 お父さんも伯父さんも漫画家で、絵を描く仕事ですよ。そういう環境で育ってこられて、泰介さんは絵を描くという方向にはいかなかったのですか？

横山 それに関してですが、僕が小さい頃描いた絵を親父に見せに行ったら、いきなりピカソが9歳頃に描いた手の習作を持ってきて「お前、こんな描けるか」と言われてね。

豊田 あれは無理ですよ。

横山 親心としては多分、「才能がある

いのに頑張っても無駄だから、違う道を行け」ということだったのだと思います。ですから、ある意味、感謝しています。多分、僕には絵の才能はないけれど、小さい頃から親父のアトリエで自由に洋書などを見ていました。それで事ある毎に「美術館に行け」とか「本を読め」とか言われていたので、今、僕がこうしてあるのは親父のおかげか、と思います。古今東西の有名な絵描きさんの本などがいっぱいありましたから、それが自然と自分の構図や色味などに何かしら影響しているのかもしれないですね。

豊田 全てが肥やしになっていたのでね。

横山 そう思います。親父がアトリエで絵を描いているのを毎日の様に見ていましたから、それは感謝しています。

サーフィンをするために 選んだ働き方

豊田 泰介さん、もう50年以上写真家をやっていますよね？

横山 そう言われるとそうかも。でもあまりピンとこないですね。好きなことをひとつやり続けて、それを「写真

家」という風には……、僕はマイナーな所ですと好きな事をやっているから、あまりピンとこないのかも。

豊田 でも好きなことがお仕事になるというのは幸せですよ。

横山 好きな時に波乗りできて、こんな自由な生き方して、皆さんには迷惑をかけたかもしれませんが、自分でもまあ幸せな人生だと思います。

豊田 印象深かった作品とか撮影など、ありますか？

横山 それは毎回毎回あります。何故かと言うと僕は人が好きだから。撮影の時には人との出会いが必ずあるでしょう。以前、よくインタビューの写真撮っていたのですが、同席しているとしてもその方のことが耳に入るでしょ。聞いている内にどんどん面白くなってきて、ある時「ハッ」と気がついたのです。自分がよくやっていたインタビューの写真は、あの当時から有名だった徳川夢声さんの対談に同席して、親父が描いていた似顔絵と同じだったのだと。よくよく考えると自分は親父の様に絵は達者ではないけれど、写真でそれをやっているのだと。そしてもしかしたらこれは天職かもしれないと勝手に思いました。

豊田 終わった後の方が面白い話が聞けたりするのではないですか？

横山 そうですね、あの当時ですから飲みに行くのは常だったらしいので、その席での話は非常に面白かった様ですね。すごく驚いたのは、あの有名な坂口安吾氏の部屋の写真を撮った有名なカメラマンが親父の知り合いで、その部屋の写真を見せたら「俺、その部屋に行ったことがあるぞ」「えっ！そうなの？」と（笑）坂口安吾氏はうちの親父と兄弟のことを書いていましたし、いい時代の文士達との交流もあって面白かったと思いますよ。

豊田 今でいうクリエイターの集まりみたいなものですね。

横山 鎌倉というのはそのいう所で、鎌倉文士がいて、伯父の関係では小林秀雄さんとかも知り合いで一緒に飲んだりしていましたね。

豊田 今までの長いキャリアの中で、苦難というか、これは手ごわいなあと、いう場面に直面した時はどうやって乗り越えましたか？

横山 この当時もそうですが、どうしてもマイナーな世界ですからサーフィンだけでは食べていけないので、家には、させてもらいましたが、陸送とか

お中元やお歳暮関連の仕事は季節毎にずつとやっていましたね。

豊田 えっ、それは撮影ですか？

横山 違いますよ、運転です。陸送で日産の本牧に行つて船に積んだりね。

豊田 あゝ、アルバイトですか。

横山 でも悲壮感はなかったですね。まあ、波乗りができればいいや、という……感じかな。東京で小さな広告代理店をやっていた義理の兄が結構写真が好きで、今でいう大御所などの付き合いがあつて、自分が使っていたカメラを僕に全部くれてね。親父は絵描きなので画集を見せ、義理の兄は写真集を見せる。アンセル・アダムスとかサム・ハスキンスの写真などが会社にいっぱいあつて「お前も写真をやつたらどうだ」と、ね。

豊田 それぞれから結構いい影響を受けていますね。

横山 今の僕は、もう亡くなった義理の兄貴の影響をかなり受けていると思います。彼は錚々たるデザイナーとよく組んで仕事をしていました。思い出すのも恥ずかしいのですが、20代後半の頃に操上和美さんという有名なカメラマンの方に、助手で頼み込んだから会つてこいと言われて写真を持つて

行ったのです。そしたら「うちは全員住み込みだ」と言われて「えーっ、波乗りできないじゃん」みたいなことを言つたら「撮影というのは、いつ何時長引くかも分からないし、電車もない。結局君みたいな人は、自分で好きな写真撮つた方がいいよ」と言われたのを兄貴に報告したら、めちゃくちゃ怒られました。その後何年か経つて、操上さんにその時の話をしたら「覚えてねえな」みたいなことで終わったという……（笑）

豊田 よかったですね、泰介さん。結局サーフィンしたいからですね。

横山 そうです。やはり東京には住めないですね。波のことが気になってしょうがない（笑）、この五十年それですから。

豊田 それで、この50年間でサーフィン業界はどんな風に変化したと感じていますか？

横山 このマイナーなサーフィンは、日本に関係なく海外から発信してきてどんどん大きくなっています。日本に入っている海外のブランドも全部そうです。それに追従してこんなに市場が大きくなつてくると、もうサーフィンから離れたビジネスモデルになつてき

ていますよね。サーフィンは、もともとドロップアウトした自由な発想から生まれた様なもので、ハワイが源流と言われていますが、そこから離れてしまふのはちよつと寂しいですね。でもこれだけ広まったのも理由があるからで、結局そこはビジネスと繋がつていくというのが個人的な意見ですが、当然だと思えます。

豊田 随分変わりましたよね。

横山 変わったと言えば変わったけれど、逆に言うと例えばアートの世界も需要が増えましたよね。サーフィンとスケートボード、スノーボード、今、アーティストは大勢いますから、そういうのを受け入れる土壌ができたというの、活性化しているのだから悪くはないと思います。

豊田 どんどん進化していますよね。

横山 アートの部分などもそういう意味ではかなり進化しています。

豊田 サーフアー人口も増えてきていますね。

横山 もう、飽和状態に近いでしょうね。サーフィンができる場所が限られているので、そこに皆が来てしまふ。昔は誰も入っていない「シークレット」ポイントがありましたけど、今はもう

入っている海外のブランドも全部そうです。それに追従してこんなに市場が大きくなつてくると、もうサーフィンから離れたビジネスモデルになつてき

ていますよね。サーフィンは、もともとドロップアウトした自由な発想から生まれた様なもので、ハワイが源流と言われていますが、そこから離れてしまふのはちよつと寂しいですね。でもこれだけ広まったのも理由があるからで、結局そこはビジネスと繋がつていくというのが個人的な意見ですが、当然だと思えます。

豊田 随分変わりましたよね。

横山 変わったと言えば変わったけれど、逆に言うと例えばアートの世界も需要が増えましたよね。サーフィンとスケートボード、スノーボード、今、アーティストは大勢いますから、そういうのを受け入れる土壌ができたというの、活性化しているのだから悪くはないと思います。

豊田 どんどん進化していますよね。

横山 アートの部分などもそういう意味ではかなり進化しています。

豊田 サーフアー人口も増えてきていますね。

横山 もう、飽和状態に近いでしょうね。サーフィンができる場所が限られているので、そこに皆が来てしまふ。昔は誰も入っていない「シークレット」ポイントがありましたけど、今はもう

入っている海外のブランドも全部そうです。それに追従してこんなに市場が大きくなつてくると、もうサーフィンから離れたビジネスモデルになつてき

ていますよね。サーフィンは、もともとドロップアウトした自由な発想から生まれた様なもので、ハワイが源流と言われていますが、そこから離れてしまふのはちよつと寂しいですね。でもこれだけ広まったのも理由があるからで、結局そこはビジネスと繋がつていくというのが個人的な意見ですが、当然だと思えます。

豊田 随分変わりましたよね。

横山 変わったと言えば変わったけれど、逆に言うと例えばアートの世界も需要が増えましたよね。サーフィンとスケートボード、スノーボード、今、アーティストは大勢いますから、そういうのを受け入れる土壌ができたというの、活性化しているのだから悪くはないと思います。

豊田 どんどん進化していますよね。

横山 アートの部分などもそういう意味ではかなり進化しています。

豊田 サーフアー人口も増えてきていますね。

グレーブルーで全部見られるので、皆が押し寄せてくる。次にリゾートができてサーファー相手のビジネスが世界中で展開される。そうなる、「どこに行っても混んでいるから嫌だな」という風になってしまふので、僕らからするとそれは贅沢だけど、これから始める若い子達にとっては当たり前の世界なのでしょうね。

デジタルの恩恵 ベースはアナログ時代に培った

豊田 写真家として作品に込めているテーマや信念は何ですか？ 別にないですか？

横山 僕の場合人物ですから。逆に言うと人物はずっと生きていて、出会った瞬間の写真を撮るわけですね。その人が亡くなっても写真には多分、その時のその人の状態が写っています。言うことは、その時のシーン、その人のパーソナリティーが写真に写っているわけです。でもある時「そんなご大層にアートだとか何だとかを考えないで、これは一種の記録作業だ」と思ったら、何だか楽になったのです。
豊田 そうかもしれませんねえ。

横山 もちろん人物を撮って、その人が上手く表現できるようにするのは、やはりその撮り手の方だと思っっています。でもそんな肩肘を張らずに、「この人のいちばん輝いている瞬間を残しておきたい」という気持ちで臨んだ方が、自分にとっても楽しいと思います。多くの日本人の俳優やハリウッドスターも撮りましたが、やはりプロサーファー、海外のワールドチャンピオンの写真を撮っている時の方が緊張してしまいますよね。何故だかわかりませんが面白いですね。

豊田 それは泰介さんらしいですね。
横山 ひとりひとり皆違いますから、全て当てはまるとは限りませんが。

豊田 その一瞬、一瞬を撮るわけでしょう。

横山 スタジオとアウトドアでは又全然違います。スタジオで撮る場合はどうしてもその人にフォーカスしないと駄目ですが、ライティングやバックスクリーンで凝ったりします。でも自然の場合は自然の中にいる人間なので、その季節ごとの場所と光が何と違って、もいちばん大切だと思います。僕はずっとこの湘南ですから、いつも気にしているのは「今この光で何時ならこ

こで撮れば最高」だと。表現を換えればここが全部僕のスタジオですから。

豊田 わあ〜かっこいい〜！

横山 その風景にその人をはめ込んで撮るかというのが、とても楽しみです。波乗りをしていますが、今の光なら何時にいい光になるのかを常に考えています。道路を走っていてもいい風景に出会ったら、「誰かをここに連れてきて、この時間帯でこんな風に撮りたいいい写真が撮れるなあ」と、新しい発見が全部いつもこの辺りであるのです。だから、僕はこちらに生まれて幸せだったと思います。

豊田 いいですよ、「ここがスタジオ」というのが。

横山 そんな大それたこと言っていないのかな。ただただ好きなことやっているだけ……。

豊田 それ、大事ですよ。撮影を進めていく中で、大切にしているルーティンとか習慣はありますか？

横山 相手の方にね、どれくらいの距離感で相対するか。あのカメラというのは一種の武器で、どんな人でもやはり緊張します。僕も撮られるのは嫌いです。それを分った上でないとい写真撮れません。

豊田 「素」な感じが、ね。

横山 モデルさんや芸能人、インタビュ慣れしている人とかは、問題ないですが。普通はカメラを向けられると「それなり」になってしまいます。いかにそういうのを外していくかを考えています。でも、もう最近はそのも考えなくなってきたかな(笑)

豊田 余裕ですね(笑)

横山 違うー！(笑) 考えると駄目なので、何だろーな、難しいですね。人にすごい興味あるから余計に大変だと思えますよ。

豊田 泰介さん達にとつて非常に重要な「写真を撮る」ということがフィルムからデジタルに変わった、その時はどう思いましたか？

横山 僕のこのフィルムの話をしますと、若い頃、サーフィンを水中で撮る時代がありましたね、今はもう無理ですが。で、36枚というのがフィルムのひとつのルールで、36枚で全部終わってしまうので、どんな撮影でも何本もフィルムを用意しておくのです。すごい沖に泳いで行って撮っていたら、36枚なんてあつという間、その時に最後の1〜2枚は必ず取っておきます。何があるか分かりませんからね。

でも、デジタルになって際限なく取れるようになったら、結局最後のその一枚2枚に賭ける思いというのが、ないので。

豊田 そうですよ。

横山 36枚というそのフィルムを大切に、1コマ1コマにフォーカスしていかないといけないから、正にその通りですね。で、デジタルになってどうかと言え、僕も受け入れているし、本当にありがたいです。何よりデジタルの前にフィルムをやってきて、上がってきたものをチェックしながら、36枚で完結しているストーリーがとても良かったと思いますし、自分にとってもすごくプラスでした。

豊田 確かに……何千枚も撮っているのですからね。

横山 編集の方達がライトテーブルでポジを選ぶ時にはその36枚を見ながら決めていきますよね。ああいう作業を全部カットしてコンピュータの画面だけで進めていくのは、又違って別の世界になっていくと思いますね。もちろん僕も、今はコンピュータで全部やっていますからそんなこと言えませんが、でも、その36枚に賭ける思いというのはすごくありましたね。

豊田 1枚を「これ」と言って決めるのは同じ行為でも、36枚の価値と何百枚では大きな差がありますね。

横山 写真で言うと、自分で現像して自分で焼くというのは頂点だと、今の僕は思いますよ。今はデジタルで全部できる、モノクロも。暗室でやっていたことはほぼ全てできる時代ですが、あの当時、現像液に入れて浮かび上がってくる像を見た経験をしていて本当に良かったと思います。デジタルの時代でもあれは生きていますね、自分の中では。

豊田 自分もそうですが、便利だし短縮できるから作業が早くなりますよね。ただ、そのアナログ時代に培ったものがやはりベースにありますね。

横山 そう思いますが、今の若い子達に言っても通用しないですからね(笑)

豊田 ホントに(笑)「AIにやらせたら?」とかね。

横山 現実にもそうですよ。カメラも写真も今はAIの時代ですからね。デジタルに「移行できて良かった」と思っていますよ。

豊田 僕は泰介さんの写真が好きで、80年代からずっと見ていますが、いつも画角の撮り方とか、かっこいいです

よね。モダンだし、だけど何だか温かい。普通、モダンなのはシャープなのに、でも何か温かい感じがする。どうしてかなと思うのですが、自分では考えてないですよ。

横山 特に考えていませんが、覗いた時にフレームは無敵ではなく決まっています。でも頭の中は無敵だからどうにでもできる。覗いた瞬間にそのカメラのフレーミングが決まってしまうから、そうするとそれは既に「絵」ですよ。例えばピカソやフェルメールとか、絵画の人達も全部構図です。そこが「大切だ」と思っているし、そこに人間が入った時、その人間がどう反応しているかによって、クールになるか優しくなるかどちらかで、それは僕と対峙している時の相手の出し方だと思います。

豊田 なるほど、そういうことですね。

横山 もちろん、僕が「ちょっとクールに行ってみない?」と言ってしまえばポーズをとったり、かっこもつけたりしますが、それは作ったものです。仕事であればそれはそれでいいと思います。でも、素の人間というのは、多分違った所にあると思うから「どうやったら素を引き出せるのかな」と考

えたりはしますよ。

豊田 どれを見ても、温かくてある意味被写体の人間味が感じられるのですが、その秘訣は?

横山 秘訣も何もないですよ。

豊田 それが泰介さんのオリジナリティなのですね。そんな泰介さんが、これから挑戦してみたい新しい表現やテーマはありますか?

横山 いつも思うのですが、人間には、得意不得意があります。どうして今僕が写真をやっているのかというと、多分他の事はできなかった、やっても駄目だったのだと思います。いちばん合っているのが写真を撮ること、それも人物のポートレートだったのではないのかな。多分、オンリーワンの事だと思います。人間ですから、ちょっと「こういう事をやりたいな」とか思う瞬間はありますが、「いや待てーそれは君には向いてない」「俺には向いてない」どうせまた失敗するから……みたいなね。

豊田 それは天の声ですか?

横山 いや、波乗りがベースですから、今でも波があると落ち着かなくて。

豊田 サーフインが中心ですかね。

横山 東京に行つて、そこそこ頑張っ



対談を終えて

ていれば多分、いい暮らしができたとしても思いますが、それは無理。好きな波乗りができて、こんな自由な暮らしは東京ではできなかったでしょう、それ以上望むのはおかしいと。こんな風にならなうと。波あつた、波」と言っている人間が、偉そうなことを言えないのは十分承知しています。この年でまだ仕事があるだけでも、本当にありがたいと思っています。

豊田 自分もそうですけれど、それは

ありがたいですよ。

やりたいことをやって 自信を持って

豊田 これからの若い写真家の方とか、クリエイターの方に、何かメッセージがありましたら。

横山 僕から言うことは何もありません(笑) 皆さんすごいし、今のクリエイターも本当にかっこいいなと思います。

す。僕の方が憧れますよ。できれば一緒に仕事したいぐらいです。豊田君とも一緒に仕事をしていますし、そんな機会があればいつも思っています。何だろうな、ああいう情熱でクリエイターできる人達というのは何か持っているのでしょうか。

豊田 情熱ですよ。

横山 情熱と愛ですよ。あつ、偉そうなことを言っていました(笑)

豊田 いやいや(笑)最後に泰介さんのファンの方々へ、今後の活動について教えて下さい。

横山 あのそんなファンなんて畏れ多くて……ただ肅々と自分の好きな事やっているのがいちばんだし、同じ事をずっと続けているのがいいと思います。逆に言うと「どんなことがあっても僕は僕だから、こういう写真を撮らせたらもう絶対に自信があるとね。ば、何も悩むことはないと思いますね。だから、僕の標語は「最高じゃん」で全部終わらせています。

豊田 『最高じゃん』というタイトルの本も出されていますね。お父さんやお爺ちゃん、伯父さんの跡を継ぐとかではなくて、漠然とでも「自分はこんなものになりたいなあ」という少年の夢

みたいのはなかったのですか？

横山 全くなかったですね。あの稲村の写真撮るまでも写真が嫌いではなかったと思います。親父からオリンパスペンを使わせて貰って、36枚が倍の72枚になるので、修学旅行でもよく撮っていました。飛躍しますが駄菓子屋で売っていた日光写真とかね、ああいうのが好きでした。全く絵の才能はないですよ。

豊田 本当にそうですか……？

横山 親父が言うからそうだと思いますよ。

豊田 お父さんは、こちらの方に行かせないように、あえて……。

横山 才能がないのにそういう所にしたがみつけても仕方がないぞと、親心ですね。今は感謝していますよ。

豊田 もし、生まれ変わったら何になりたいですか？

横山 今と同じですね。

豊田 へえ。言い切りましたね(笑)今日は夕日が沈むのを見ながら泰介さんのスタジオでいろいろ聞かせていただきました。楽しかったです。ありがとうございました。

横山 こちらこそありがとうございました。楽しかったです。